

特別講演 2

「地域で支える患者本位の在宅緩和ケア」

尾道市医師会長／片山医院 院長

片山 壽 先生

2037年には国内の年間総死亡者数は170万人を超えるという推計は、現状の医療体制に大きな転換が迫られる課題である。現在も3分の1はがんによる死亡者との結果が出ている中で、終末期医療の中に国民から強く標準化が求められているのが、在宅緩和ケアの普及である。がん末期であっても、最期は自宅で過ごしたいという国民の希望に沿える地域医療の体制を、どの地域でも構築すべきである。ここで必要なことは急性期病院のがん患者への緩和ケア体制の充実と、患者の家に帰りたい希望を実現させることができる「帰すことができる実力」と、在宅主治医が行なうチーム医療を核とした多職種協働が「在宅で受ける側の実力」が、地域医療連携をベースとして患者本位に機能する end of life care のシステムの構築である。尾道市医師会で進めている The OMA method on end of life care management programs を例に、この領域における内科医、開業医の重要性について述べる。